

## 山梨県若手研究者奨励事業 研究成果概要書

所属機関名	中央大学大学院文学研究科心理学専攻
職名・氏名	博士後期課程 1 年 塚田 花音

### 1 研究テーマ

「高齢者におけるデジタル技術利用の促進に向けた調査および介入研究」

### 2 研究の目的

本研究は、高齢者によるデジタル技術の利用促進と、それを活用したサービスの活用可能性の検討を目的として実施した。近年、非接触・非対面型のデジタルサービスが急速に普及する中で、山梨県においてもデジタル技術を活用した施策が進められている。一方で、高齢者におけるデジタル技術の利用は依然として限定的であり、その背景には、高齢者の特性に応じた支援の不足や、若年層による否定的な認識（デジタル・エイジズム）の存在があると考えられる。

そこで本研究では、高齢者のニーズに即した支援体制の検討（研究 1）および、高齢者のデジタル技術利用に対する若年層の偏見の軽減（研究 2）に取り組んだ。これにより、高齢者がデジタル技術を主体的に活用できる環境整備に資する知見を得るとともに、山梨県における実践的な活用可能性を示すことを目的とした。とりわけ山梨県における高齢者支援施策への応用可能性を見据えた実践的知見の創出を目指した。

### 3 研究の方法

#### 研究 1

本研究では、Everyday Digital Literacy Questionnaire (EDLQ; Choi et al., 2023) の日本語版作成およびその妥当性検討を目的として、以下の手順で実施した。

まず、原著者より提供された英語版尺度を日本語に翻訳した（2025 年 6 月）。次に、高齢者研究を専門とする研究者 3 名（うち 1 名は IT リテラシー関連資格保持者）による内容の妥当性確認を行った（2025 年 7 月）。その後、翻訳の正確性を担保するため、専門業者によるバックトランスレーションおよび英文校正を実施した（2025 年 8 月）。これらの過程を経て、原著者より日本語版の使用許可を得た（2025 年 9 月）。

さらに、予備調査として高齢者 15 名を対象に質問紙の実施可能性を確認し、大きな問題がないことを確認した（2025 年 10 月上旬）。その後、本調査としてシルバー人材センターにおいて約 200 名の高齢者を対象に質問紙調査を実施した（2025 年 11 月）。加えて、全世代を対象とした調査として、オンライン調査（370 名）および郵送調査（50 名）を実施した（2026 年 2 月）。

#### 留意事項

- ① 3 枚程度で作成してください。
- ② 特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。

## 研究 2

本研究では、高齢者のデジタル技術利用に対する否定的態度 (デジタル・エイジズム) の実態とその軽減可能性を検討した。

クラウドソーシングサービスを用いた調査を実施し、高齢者のデジタル技術利用に対する認識の歪みについて検討した (2025 年 10 月)。具体的には、高齢者のスマートフォン保持率や SNS 利用率の推定値を回答させ、既存統計 (NTT ドコモ等) との乖離を分析した。

また、この認識の歪みが否定的態度に影響するという仮説に基づき、介入実験を実施した。東京都内の大学生 (2025 年 4 月)、および山梨県内の中学生・高校生 (2026 年 3 月) を対象に、高齢者およびそのデジタル技術利用に関する正確な情報を記載した文章を提示し、介入前後での態度変化を測定した。なお、山梨県内の中学生を対象とした調査に際しては、事前に副校長および教務主任との対面での打ち合わせを行い、中学生にも理解可能な内容となるよう項目の精査を行った(2026 年 2 月)。

さらに、シルバー人材センターにおける質問紙調査において、高齢者自身が認識する社会の否定的態度およびその心理的影響についても検討した。

## 4 研究の成果

### 研究 1

EDLQ 日本語版の作成プロセスを通じて、尺度の翻訳および文化的適合性の確保を行った。現在、得られたデータを用いて信頼性および妥当性の分析を進めている。これらの知見は、高齢者のデジタルリテラシーを多面的に評価する基盤を提供するとともに、今後の支援方策の設計に資するものである。

また、本調査データを用いた追加分析により、高齢者の SNS 利用と性格特性との関連が示された。具体的には、LINE の利用は外向性と関連し、X、Facebook、Instagram といった他の SNS の利用は開放性と関連することが明らかとなった。これらの結果は、高齢者におけるデジタル技術利用の個人差を理解する上で重要な知見を提供するものである。

### 研究 2

クラウドソーシング調査の結果、高齢者のスマートフォン保持率や SNS 利用率は、実際の統計値よりも全体的に低く見積もられていることが明らかとなった。さらに、高齢者のデジタル技術利用に対して否定的な態度を有する者ほど、その過小評価の傾向が強いことが示された。

介入実験の結果、正確な情報を提示することにより、大学生においては高齢者に対する否定的態度の有意な低減が認められた。一方で、中学生・高校生のデータについては現在分析中である。

また、高齢者対象の調査では、若年・中年層の方が高齢者よりもデジタル技術利用に対する否定的態度の得点が高い一方で、高齢者の回答はばらつきが大きいことが示された。さらに、高齢者が認識する否定的態度は、デジタル技術に対する自信 (自己効力感) を媒介し、モバイル機器の使用熟達度の低下に影響を及ぼすことが明らかとなった。

これらの結果は、高齢者のデジタル格差が単なる技能の問題ではなく、社会的認識や心理的要因と密接に関連していることを示唆するものである。

### 留意事項

- ① 3 枚程度で作成してください。
- ② 特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。

## 5 今後の展望

### 研究 1

今年度収集したデータの詳細な分析を通じて、高齢者のデジタルリテラシーにおける具体的な課題を明らかにすることを目指す。また、本研究で用いた自己評価式質問紙に加え、実際のスマートフォン操作課題等を導入し、主観的評価と客観的な技能との乖離を検討する予定である。これらの知見を基に、高齢者が安心してデジタル技術を活用できるような実践的介入の開発につなげる。

### 研究 2

高齢者にサービスを提供する企業や自治体関係者等を対象として、高齢者のデジタル技術利用に対する認識の実態を明らかにする。特に、「高齢者はオンライン手続きが困難である」といった前提のもとに紙媒体や対面手続きが維持されている状況に着目し、こうした認識が高齢者のデジタル利用機会を制限している可能性を検討する。さらに、実際に手続きのオンライン化を進めた場合の影響を検証することで、高齢者のデジタル利用機会の拡大に資する方策を明らかにする。

## 6 研究成果の発信方法（予定を含む）

本研究の成果については、国内外の学会発表および学術論文として積極的に発信している。

まず、Everyday Digital Literacy Questionnaire (EDLQ; Choi et al., 2023) の日本語版については、現在信頼性・妥当性の検討を進めており、その成果を国内誌にて報告する予定である。さらに、多世代データとの比較分析を行い、国際誌への投稿を予定している。

高齢者の SNS 利用と性格特性との関連については、国際学会に抄録を提出済みであり、現在受理結果を待っている。

クラウドソーシングサービスを用いた調査による、高齢者のデジタル技術利用に対する認識の歪みに関する研究は、2026 年 3 月の発達心理学会においてポスター発表を行い、現在国際誌に投稿中である。

また、東京都内の大学生を対象とした介入研究については、2025 年 9 月の日本心理学会にてポスター発表を行い、現在国内誌に論文を投稿し査読対応中である。山梨県内の中学生・高校生を対象とした介入研究については、国内誌の高齢者偏見に関する特集号への投稿を予定している。

さらに、高齢者を対象とした調査のうち、世代間比較に関する結果については、2026 年 6 月の老年社会科学会にてポスター発表を予定している。また、否定的態度が自己効力感を媒介してモバイル機器の使用熟達度に影響を及ぼすという知見については、国際学会に抄録を提出済みであり、現在受理結果を待っている。

以上のように、本研究の成果は国内外の学会および学術誌を通じて継続的に発信していく予定である。

### 留意事項

① 3 枚程度で作成してください。

② 特許の出願中等の理由により、一定期間公表を見合わせる必要がある箇所がある場合であっても、所定の期日までに公表可能な範囲で作成・提出してください。当該箇所については、後日公表可能となった際に追記して再提出してください。